熱血うどん旅　44

穴場タブー破る直感

人物列伝

田尾和俊さん　恐るべき仕掛け人（上）

「もうちょいや。もう少し練ってみ」。昨年11月、田尾和俊さん(57)は、善通寺市の四国学院大学の講義室で学生たちのアイデアに注文をつけていた。講義の名前は「印刷情報加工ワークショップⅡ」。

「香川の伝統工芸品をPRする」をテーマに、実際に学生たちに企画を立てさせる授業で「どうすればおもしろく見せられるか」を求めていた。田尾さんの熱弁は授業の90分間ずっと続いた。

肩書は四国学院大社会学部教授。30年ほど前はタウン情報誌の編集長だった。89年、讃岐うどん店の穴場を探し回る連載「ゲリラうどん通ごっこ」を「月刊タウン情報かがわ」で始めた。

それをまとめた単行本「恐るべきさぬきうどん」を93年に発刊。02年までのシリーズ全5刊は計10万部を超えるベストセラーとなった。大阪万博、瀬戸大橋開通に続き、「恐るべき」シリーズは「第3次讃岐うどんブーム」を巻き起こした。

田尾さんは、関西学院大経済学部に在学中、スポーツ新聞で競輪や競馬、競艇の成績を書きとめる電話取りのアルバイトに明け暮れた。単位不足で留年を覚悟していた4年の夏、帰省したときに高校時代の友人にくっついて会社説明会をのぞいた。

大人社会でもまれたバイト生活が役立ったのか、高松市の広告会社「セーラー広告」に就職が内定した。同社の子会社の出版社に出向した82年、「月刊タウン情報かがわ」の初代編集長に就く。

タウン情報を愛読する若者の関心は、もっぱらファッションやグルメ、ライブチケット。親会社の幹部に「うどんは、やらんのか」と言われたが、生返事を繰り返していた。

タウン情報誌にとって、うどんは「タブー」と思っていた。「オシャレ」を求める若者にとって、「讃岐うどんは、おっさんの食い物。ダサイ」と映る。「うどん特集を組めば、部数が半減し、スポンサーが取れない。うどんに若者やOLを動かすポテンシャルはない」と確信していた。

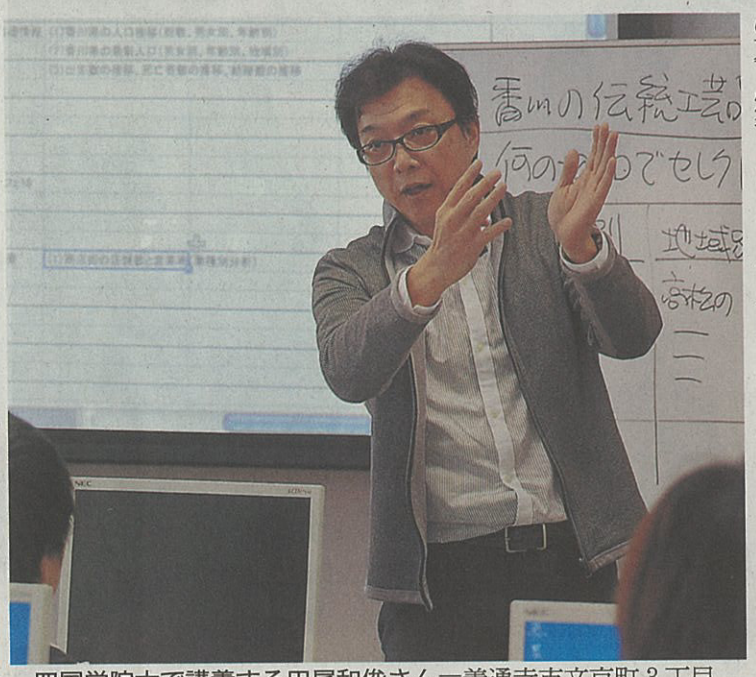
88年秋のこと。高松市内のデザイン事務所でくつろいでいると、広告会社の後輩だった安藤芳樹さん(55)が昼食を誘ってきた。田尾さんの運転する車は、安藤さんの案内で高松市南部の細い田んぼの中の道をたどり、1軒の民家にたどりついた。

看板は見あたらない。農機具小屋のような造りに「なんや、ここは」とつぶやいた。トタン屋根の小屋に足を踏み入れると、そこは製麺所だった。よく見ると、1人の客が簡素な赤い丸いすに座って黙々とうどんをすすっていた。香川出身の田尾さんだが、製麺所の中のうどん屋は初めてだった。

集客に全く向かない田んぼ近くに立地し、看板が見えない店構え。近所のおばちゃんが、頭にカーラーを巻いてジャージーの上下でやって来る。うどん店のこの「怪しさ」に若者を引きつけるレジャーの要素がふんだんに詰まる、と直感した。

それから2、3週間後、後輩の安藤さんのポケベルを鳴らした。「あの手の店をほかに知らんか？」。「恐るべき」ブームをつくった「麺通団」は、こうして生まれることになる。

（高橋孝二）



四国学院大で講義する田尾和俊さん＝善通寺市文京町3丁目

たお・かずとし　1956年、三豊市詫間町生まれ。観音寺第一高校、関西学院大卒業。82年に「タウン情報かがわ」の初代編集長。89年、穴場のうどん屋を探索する「麺通団（めんつうだん）」の団長に。03年4月から四国学院大教授。

◆「熱血うどん旅」は毎週日曜日に掲載します。過去の連載記事は朝日新聞デジタルの「連載・マガジン」コーナー（http://www.asahi.com/rensai/）で読むことができます（有料）。

熱血うどん旅 45

「怪しげな」店を探せ

人物列伝

田尾和俊さん　恐るべき仕掛け人（中）

1982年5月に創刊した「月刊タウン情報かがわ」の編集室は当時、高松市古新町のビル3階にあった。広さは約70平方㍍、最初は4人が働き、4千部しか売れなかった。

88年秋、編集長の田尾和俊さん(57)は「来月1、2ページちょうだい。おれが埋めるから」とスタッフに声をかけた。後に「麺通団」の「知将」と呼ばれる広告会社の安藤芳樹さんに連れていかれた「怪しげな」うどん屋を特集しようと考えていた。

グルメとしての「うどん」は若者に見向きもされないが、レジャーとしての「うどん」なら若者を引きつけることができる。そう読んだ。

知り合いに声をかけると、たくさんの「怪情報」が集まってきた。

商売には、あまりにも不向きな道の狭い田んぼの中の集落にある「がもう」（坂出市加茂町）。今や人気店の筆頭だ。この先は森だと思ったところに出現する「やまうち」（まんのう町大口）。うどん店と分からない名前の「谷川米穀店」（まんのう町川東）。納屋や倉庫、養鶏場を改造したような作りの店があった。レジはなく、勝手にうどん玉をゆでて代金を置いていく店もあった。

こうして「ゲリラうどん通ごっこ」の連載企画が88年12月発売のタウン情報かがわで始まった。権威ある「讃岐うどん通」からの批判もかわせるよう、「うどん通」の両端を「ゲリラ」と「ごっこ」ではさんだ。

最初はうどん店を知る営業担当者が書いたが、出来上がった紙面は1ページに4店がまんべんなく配置されていた。普通のグルメ雑誌と同じだった。

編集に携わった本を手に取る田尾和俊さん＝善通寺市文京3丁目の四国学院大学

「これは違う。おれが書く」と1月号から田尾さんが執筆した。グルメ的な表現、味わいは排除した。詳細な地図も、写真も掲載しなかった。読者には苦労してその店を発見した時の喜び、達成感を味わってもらいたかったからだ。

新しい記事の出だしは例えばこうだった。「H氏がとんでもない店を発見したと報告してきた」。うどん店へ行く道中で「こんなところにあるんか？」とボヤキ声を上げたり、迷子になったり、「どっひゃー」と声をあげたりと、取材の過程をそのまま載せた。「麺通団長」として田尾さんの個性を前面に出した。

記事はレジャーの楽しみ、発見の喜び、感動をトッピングした内容に仕上がった。それはテーマパークのアトラクション巡りにどこか似ていた。

「タウン情報かがわ」の連載を単行本化した「恐るべきさぬきうどん」。讃岐うどんブームを巻き起こした

「青色の屋根から湯気が出ているので、行ってみると、うどん屋でした」。半年もしないうちに、学生たちから手紙やはがきで、うどん屋情報が届くようになった。それを読んだ田尾さんは「かかった」と思った。それまで、せいぜい近所のうどん店に行く程度だったのが、中高生や大学生がうどん店巡りを始めていた。発売部数は2万部を超えるようになった。

県内でうどんブームが起きていた94年、食の専門出版社「柴田書店」（東京都）が目を付け、「香川のうどん店を取材したい」とコーディネートを依頼してきた。翌年には専門誌「そばうどん」が、「源流発掘さぬきうどん」と題した特集を組んだ。すると、東京の雑誌からの取材が相次いだ。

そして、このブームが丸亀出身のある映画監督の目に留まった。

（高橋孝二）

■「ツイッター」でトリビアな話、募集中。アカウント名は「asahi_takamatsu」

熱血うどん旅　46

「UDON」ブーム拍車

人物列伝

田尾和俊さん　恐るべき仕掛け人（下）

ゆで上がったばかりの麺に生卵を落とす。醤油をかけ、刻みネギをふりかける。陽光に輝くツヤツヤの麺。熊に追われて道に迷い、2人がたどり着いたのはまんのう町の三嶋製麺所だった。タウン情報編集者の松井香助と宮川恭子は、店主の三嶋アキミさん(76)が出した「釜玉」をすすり、至福の表情を浮かべた。

2006年に公開された映画「UDON」の導入部のシーンだ。松井をユースケ・サンタマリア、宮川を小西真奈美が演じていた。この場面設定が田尾和俊さん(57)が勤めていた「タウン情報かがわ」をモデルにしていることは、うどん通ならばすぐにわかる。

「踊る大捜査線」で脚光を浴びる映画監督の本広克行さん(47)が、故郷に錦を飾ったのがこの映画だった。「あれを上回る作品はまだできていない」と本広さんは言う。

03年、丸亀西中学校の同窓会が地元のホテルで開かれた。参加した本広さんは同級生から「地元のために何かしてくれんか」と頼まれた。三豊市に住む食通の弟(44)に誘われ、うどん屋をめぐったのもその年だ。「子どものころと違う。うまい」と感じた。

田尾さん率いる「麺通団」が「恐るべきさぬきうどん」を出版して火をつけたブームが、讃岐うどんのクオリティーを上げていると気づいた。

「東京に出て田舎に帰ることはない」と思っていた本広さんに里心が芽生えた。

煙突から湯気が上がる「三嶋製麺所」。店に看板はなく営業中の目印だ＝まんのう町川東

FM香川の番組でうどんを語るのも田尾和俊さんのライフワークだ＝高松市西宝町1丁目

うどんを映画に出来ないか。だが、関東では「うどんは病人食」のイメージがあった。何度も、映画関係者を連れてうどんを食べに来た。そんなおり、本広さんはスタッフらとともに善通寺市の四国学院大を訪れ、田尾さんに「映画の脚本を書いてほしい」と頼んだ。田尾さんは「違う才能だから」と断った。

そんな経緯があった。本広さんが「9割が事実」という映画「UDON」は06年8月に公開される。興行収入は13億6千万円。田尾さんが火をつけたうどんブームというロケットは、2段目に火がついた。

映画に影響された店があると聞き、今月2日に訪ねた。坂出市加茂町の「がもう」だ。「UDON」にも登場したが、この日も映画のシーン同様、数十人の行列ができていた。

午前1時から仕込みにかかる店主の蒲生正さん(65)は「しんどい仕事やから、わしの代で終わらせるつもりやった」と話す。だが、この行列が次男の諭志さん(36)を刺激した。

「子どものころは昼時だけの客だったのが、朝、店を開けたら、ずんずん客が入ってくる。すごいことになっているとは聞いていたが」と諭志さんは驚いた。富山県で衣料品店の店長をしていたが、6年前に古里に帰り、店を手伝っている。諭志さんは「田尾さんはうどんを盛り上げてくれた。今、うどんをやらしてもらえるのは田尾さんのおかげ」と感謝の言葉を口にする。

「讃岐うどんの応援団」と自称する田尾さんには今、危機感がある。

「香川県は讃岐うどん店のテーマパーク。アトラクション（遊戯施設）はバリエーション（種類）があってこそ。ところがうどん店のチェーン化が進んで、すべてが一緒になっていく心配がある。それではテーマパークの魅力が損なわれてしまう」

県の調査では、95年に600万人台だった県外からの観光客は、「UDON」が公開された翌07年には800万人台を超え、今も増える傾向にある。

（高橋孝二）

＝この項、おわり

■「ツイッター」でトリビアな話、募集中。アカウント名は「asahi_takamatsu」